

市民とともに社会を変える

「気候変動問題」に挑む

フォーラム第1部講師 **平田 仁子** 氏

一般社団法人 Climate Integrate 代表理事



気候変動に正面から向き合いたい

大学生のときに「地球サミット」がありまして、初めて気候変動や地球温暖化のことを知りました。それまではもう全く知らなかった。のんきに大学生をやっていただけで、やっぱり地域の環境だけじゃなく、地球規模で人間が環境悪化を起しているというところに、大変な衝撃を受けました。何がしたいとか、何ができるのか、そういうことは分かりませんでした。が、「これは一体何なんだろう」と。そこから環境について気になり始めました。就職するときには、全く何をしたいか分からなかった。出版社に入りまして。しかし、この問題が気になって、本を読んだりいろいろ自分で情報収集したりして、どんな風に関わっていけるのか、仕事をしながら考えていました。それで3年半ほど働いたときに、「この問題に正面から向き合いたい」と。

そのときには企業に入ったり政府に入ったというところではなく、この問題にしっかりと向き合える環境団体に所属するのが良いのではないかと考えました。アメリカのNGOがこんな風にやっているのかを



アメリカ時代 1997年撮影 (右平田氏)

学びながら、この気候変動に関わっていくこと。ここまで、3年半ぐらいかかっているということ。ZCO(そが)の問題を前に進める上で大事な存在なのではないかと思っただけの、当時は日本の環境NGOがあまり育っておらず、私もすぐには貢献できるものはないというところで、アメリカのZCOの働き方を学んでこようという気持ちがありました。

その後、日本で大きな気候変動の会議があつて、日本のZCOが盛り上がってきたときには、やはり日本に帰って、日本でこの気候変動問題に取り組みたいと思っていました。京都会議という会議を境に日本に戻ってきたとき、「気候ネットワーク」という、日本の気候変動に取り組みたいという感じですが、飛び込んだという感じですが、

ヒントを求めて学問の世界へ

27歳ぐらいから気候ネットワークで働いてきたので、かなり長い間、ずっとZCOで一生懸命になって、必死になって取り組んでいました。ですが、その10年、20年という活動の中で、日本の環境団体の力の弱さもあつたり、なかなか成果が上がらなかったり、人々も知っていないけれど、あまり関心がなくて、気候変動対策に盛り上がりがありませんでした。選挙のテーマにもあまりならないな、自分自身が同じ場所です。自分自身が見ているのと同じ問題を返して、視野を広く持ちたい。また学問の世界に、あるいは文献というところ、理論というの、この問題を突破するヒントがあるのではないかと考えたので、修士課程から大学院に戻り、

博士まで6年間、記憶力が衰える中で頑張りました。大学院での研究は、政策動向をZCOとして見て調べて、関係者と話をしていたことが情報の土台としてあつたこと、すこし長い目で見ていったことを客観視して、これがどんな意味があるのか、どういったパターンで、どのような力が働いているのかという結果になつていました。法律が必要だとか、企業の取り組みが必要だとか、発電所を建ててはいけなかつたのか、いろいろやってみても十分に進んでこなかった。このような失敗を繰り返して、本当の意味で変化を起すヒントが欲しいと思つて、現場感覚を持つて研究できたという意味では私の中ではリンクしていま

略歴

- 1970 熊本県で誕生
- 1990 地球サミットを通して、気候変動に興味を持つ
- 1993 聖心女子大学卒業 出版社へ就職
- 1996 出版社を退職
アメリカのNGO
「Climate Institute」へ
- 1998 日本のNPO
「気候ネットワーク」に参加
- 2007 同NPO 東京事務所長就任
- 2013 同NPO 理事就任
- 2019 早稲田大学社会科学部研究科
博士課程修了(社会科学博士)
- 2021 ゴールドマン環境賞受賞
- 2022 「Climate Integrate」設立

Climate Integrate
日本の想

気候ネットワークに23年もいましたので、その間大学院にもいきましたが、気候ネットワークとともに自分自身は走ってきたと思います。これからこの思いは変わりませんが、これから先は本場の意味で変化を起こしたいと思っています、もう一段ZGOや社会の取り組みというのを大きくしたいし、またそこで本当に必要とされている仕事ができる人材を得たい仕事ができる意味で、もう一段頑張ってみようと思いました。

「カーボンニュートラル」というのが、ピン止めされ、もう否定されない目標になっているので、あとはそこをどうやるか、できないという人ができるというようなステイジに入っているの、それを後押しするような仕事ができるかと思っています。



国連会議での記者会見
(左から3人目平田氏)

日本での評価が
変わってきた

昨年、ゴールドマン環境賞という国際的な賞をいただいて、石炭火力を作り続けるのは問題だと地道に取り組んでいたことが、海外から評価されました。賞が大きいものでしたので、それ自体が目目されて結果私になりましたが、そのおかげでいろいろなところから、今までよりも多くの声をかけていただくようになりました。

しかし、賞がなかったら日本では評価を得られていなかったというか、ZGOは地域で反対運動起こしている人たちだと思っている人もいるし、例えば気候変動が心配だと思っている人にZGOの活動が支持されているかという、そもそも知られていない。ZGOの存在を知っている人も、「過激な人たち」や「反対運動する一部の人たち」というように思われている。石炭火力は気候変動に関して最大の問題だから私たちは活動に取り組んでいるけれども、一般の人は「日本に石炭火力なんてあるの？」くらいなので、全然目の目を浴びない中でやってきました。なので、今は賞をもたなくて、それが見えるようになって、これは世界的にも地球環境を守るために

意味のある活動だった、と外から評価されることによって、日本の中での評価が変わってきたと私自身は思います。

ただ、私自身は変わっていないので、23年間ずっと同じことをやっているのですね、賞が私自身にも光りを当て、取り組みにも光りを当てることになって人々の見方が変わってきたと感じます。これは素晴らしい活動ではないかと。今まで言ってもらえなかったよすけれども、そういう風になってきたのは感じています。

だから私自身居心地が悪くて、人が私の見方を急に変えるというか違う目で見られるようになったことに戸惑いは感じています。でも、そんなことは個人の問題であって、これをきっかけに「石炭火力ってそうなんだ」、「このように取り組んでいっている人がいるんだ」、「応援しよう」という風に思ったり、あるいは気候変動を知るとか講演会に呼んでみよう、とか話をきいてくれる人が増えたりするのはいいことなので、前向きに受け止めてはいます。しかし、私としては「海外から大きな力を受け取ったな」と思っていて、日本の中では残念ながら生まれてこなかったなと思っています。



ゴールドマン環境賞受賞

自己完結では
答えは出ない

この問題の教えられ方が、「温暖化が大変なのでみんな協力して頑張りましょう」という形なので飛躍してしまうのですが、情報があっても何をすればいいかわからない人が多すぎるので、それは、私の最初のころにあった大きすぎる何をしたいかわからない戸惑いと同じで、結局変わっていないのです。じゃあなるべくペットボトルを減らすとか行動するのは良いのですが、やったところで温暖化が止まらないのはみんな分かっているのですよね。もっと大きなことをしなさいといかないし、そもそも「この仕組み自体も問題でしょ」となると、できなくなることがなくなり立ち止まって結局何もしていない政治と自分が繋がっていないと思わないように、地元

自分たち個人が繋がっているように思えない。そこに開わりを持って何かを変えたいというものが出来ると思えないというように、「参画意識」のようなものが薄いのかと思うのです。社会は変えることができると思っている日本人は少なく、「私には無理」という人が多い一方、ヨーロッパでは「私たちは変えられる！」とみんな思っている。

この問題は自己完結では絶対に答えは出ないので、企業はどういう取り組みをしているのか、地域では会社はどうしているのか、政治家はちゃんとこの問題を考えられているのか。自分自身にできないことがあるとして、この問題に関心があるのだったら、決定権を持つている人たちがちゃんとやっているかというところまで、聞いたたりお願いしたりして変えていくというところまで挑んでほしいです。



地元住民と石炭火力発電所計画を確認する平田氏（右側）

第31回 環境フォーラム

グリーン
リカバリー

2022年6月7日（火）

13:30~17:00（予定）

コロナ危機から考える
みらいのカタチ



申込はこちら



公式インスタ



公式フェイスブック